

●軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦

玉碎地 グアム島の風

玉砕地　グアム島の風

岐阜県　中矢正雄

昭和十八（一九四三）年、大東亜戦争真つ只中、男子ならば誰も彼もが戦争に向けて出発して行ったが、もう敗色は漂っていた。「アツツ島の玉砕」とか、「日本海軍の敗退」とか、大本営発表でも隠し切れないいろいろなニュースが国民の心を不安にした。「神風がなぜ吹かないのだろうか」等の声が出るようになって、国民は一生懸命竹やりの訓練に余念がなかった。

そんな折、私は当時十八歳で、村の青年団活動の中心にあり、いろいろな面で頑張っていた。「国の大事を救わねば」と、当時の若者が皆血気にはやったように、私も「徴兵までは待てぬ」とばかり、県庁へ志願書を出した。採用通知を受け喜び勇んで家に帰り、両親や兄貴夫婦に報告したところ、家中驚いて猛反対して、兄貴は早速県庁へとんで取消しに躍起になったが、本人が希望してやまないためにとうとう出発と決まった。

当時、息子を戦地へ送ると言ってもあまり悲しみも表せない辛い思いの両親や兄貴夫婦、弟妹達に別れを告げ、部落の人々や村の人達に見送られ、昭和十八年八月十二日、勇んで壮途についた。

呉の訓練所

設営隊員として、岐阜県庁で勢揃いした四十人あまりの方々と一路広島へと向かった。

到着した所は、江田島兵学校で、そこで東北地方や九州方面から集まった千人あまりと共に、兵学校で二十日ほど訓練を受け、次には広島の乃美尾村という山村で現地訓練を二週間あまり行った。訓練中の食事は毎日毎日カボチャが主食で、うんざりしたものだ。たまの休日に広島町の町中へ出てみても、もうこの頃は食べる物はほとんど無くて、カボチャの煮つけや柿、早物ミカンをたまに見るくらいで、殺風景なものだった。

日本出発厳しい海路

昭和十八年九月十五日、海軍第二百十八設営隊は新井少佐を部隊長として呉軍港を出発したが、新井部隊長から呼び出しがあり、何かと出頭したところ、新井少佐から「君も岐阜県飛驒出身らしいが、己も高山出身だ。これから俺の従兵になってくれ」とおっしゃって以来三年あまり共にグアム島で過ごすこととなったのである。

設営隊が乗り込んだ船は、七千トン級の輸送船で「宇洋丸」と言い、かなり大型の船であった。呉から瀬戸内海を経て東京湾に向かう途中、熊野灘で米潜水艦の雷撃を受けて驚いたが、沈没はまぬが

れた。そんな後だけに、東京湾で荷物を積み込む時に見た富士山の美しさはずっと忘れられなかった。東京湾からグアム島まで輸送船で十昼夜、「宇洋丸」は、米軍潜水艦の魚雷を避けてジグザグコースを取って進んだため大幅に遅れて、十五日間かかって終わった。

「宇洋丸」の中の隊員達はすごい船酔いに苦しんだ。甲板へ上がる事は禁じられて、舟底の隊員達は前後左右に転がされて半病人になってしまった。たまりかねた私は密かに甲板へ上がりマストの陰で風を受けていた所、監視員に見つかり吹っ飛ばさざれば、何日も顔がゆがんでいた。

グアム島到着

昭和十八年九月三十日、グアム島へ到着したが、グアムの浜辺には珊瑚礁が多く、船を付ける個所が限られていて、大型船は近寄ることが出来ず、沖に停泊するため荷揚げ作業はとても手間取り、終了までに一週間あまりかかった。

米軍支配下にあつたグアム島を日本軍が占領して以来、当地は第二線抜いで「宇洋丸」到着当時、警備隊員も三十人内外で海軍第二百十八設営隊と合流して、サイパン関係と連絡を取りながら飛行場整備が進み、次には陸軍も到着、海軍警備隊も増員されて次第に第一線化されていった。

こうして昭和十八年九月三十日から米軍空襲の同十九年三月までは一見平和な守備と建設生活が始まった。

新井部隊の組織は次である。

第一中隊 機械班 中隊長 宮崎大尉

第二中隊 土木班 中隊長 岩下中尉

第三中隊 建築主力班 中隊長 菊池大尉

グアム島整備命令下る

到着早々に新井部隊は飛行場整備命令を受けた。飛行場の滑走路の第一は千メートル、第二は二千メートル仕上げとのことであつた。程なく第二百十七応援部隊中島部隊およそ千人が応援に到着。

滑走路は着々と進んだが、格納庫造りはカモフラージュ造りのため手間取つた。飛行場造りの方は最後までには四カ所の予定とのことだつた。飛行場造りのむずかしさは風向き調べのむずかしさなどで、設計の段階で追い風でなく風に向かつて飛ぶようにすると聞いて驚いたことも思い出す。グアムの工事前の重機はほとんど日本から持つてきていた。第一滑走路、第二滑走路と完成し、第三も大體出来上がった。

日本産の重機はよく故障したが、困つた事に日本産のは各種の部品がそれぞれ異なり修理に苦労した。これに対し米軍の重機は優れ、部品が統一され、どの機械にも適合され修理に便利だったが、後には燃料も補給が続かず、ほとんどが人力が主となり、工事の進みが悪くなっていった。

米軍の逆襲

一見平和に見えたグアム島も米軍が順番に本土からの輸送を断ち、じわじわ逆襲を始め、昭和十九年三月のグアム島大空襲以来、程なくして敗色が濃くなってきた。

私も部隊長の従兵だけを務めている訳にはいかず、相次ぐ空襲の中でも伝令に走り回る日が続いた。白昼伝令に走る私の前後を敵の艦砲の狙い撃ちの砲弾が炸裂した。危ないと思つて地に伏した瞬間また第二弾が炸裂。左目の激痛と吹き飛んだ眼鏡のことなど考える暇もなくひた走り、部隊長に返事をするころには左目の視力はほとんど無かつた。顔面や足の膝等に爆風で吹き付けられた小石や砂を自分で掘り出すのもそこそこに、再び次の伝令に走つた。

艦砲に狙われて、目の前の大きな岩場に隠れようと思つたその時、耳の近くで亡くなった姉の声で「正、こつちへ来い」と呼ばれたような気がして声のした方向へ走り寄つた。とたん、今自分が隠れようとした岩場が直撃で吹き飛んだ。あの時のあの亡き姉の呼び声は一体何だつたのだろうか。

それと、この頃大勢の戦友と作業中、たまたま砲弾をしのぐため入つた洞窟の中で、何とも嫌な予感で胸騒ぎと言うか、じつとしていらなくて弾の中へ飛び出していった。すぐ後、すごい爆発音に驚いて振り返つてみたら今の今まで皆と避難していた洞窟が跡形もなく吹き飛んでしまつていたというところもあつた。この時の胸騒ぎと言うか嫌な予感と言うか、それとあの亡き姉の声と言ひ、今考えても分らない。

こうして日本軍が守るグアム島も今までに兵員は増員され、飛行場を造り、砲台も増設されても肝心の燃料や砲弾が日本から届かなくなつて、度重なる米軍のグラマン戦闘機の空襲にも高射砲も高角砲も迎え撃つことは出来なかつた。

日本軍の物資不足を知つた米軍は、空襲と共に軍艦からの艦砲射撃の無差別砲撃を続けた。後から聞いた米軍通訳の話によると、米軍の撃つた弾は一坪の土地に六百発使われたとのことだつた。

米軍グアム島へ上陸

物量を誇る米軍は、昭和十九年六月十五日上陸作戦を試みた。上陸用舟艇が次から次から群をなして上陸して来た。弾も無く、武器らしき武器もない日本の兵士達は大和魂と日本刀とごぼう剣と肉弾で反撃し、第一回目はかろうじて撃退した。

米軍はますます無差別に爆撃を激化して島の地形の変わるほど撃ちまくつた。七月十五日、大掛かりな上陸作戦が開始されて、米軍は島のど真中を割り込んで上陸し、攻め込んできた。グアム島は南北に分断され、今は肉弾も及ばず、なす術は無かつた。

新井少佐率いる設営隊も武器と言えば隊員達がそれぞれ最期用に使っている手榴弾とごぼう剣と、まれに個人で持っている日本刀と新井少佐護身用の十四年式十五連発一丁と軍刀のみであつた。軍司令部へ連絡したところ「全員協力して持久戦で戦うようジャングルへ入つて時期を待て、そして追々

島の北側の北岬の方向へ集結するよう」との命令だったので、夕闇を期して、全員ジャングルへ逃げ込むことになった。こうして再びグアム島は米軍の占領する島となったのである。

グアム島の日本兵ジャングルへ

中部太平洋方面軍艦区司令官南雲中将はその責任を負って割腹自決された。このことはずっと後に米軍の捕虜になってから聞かされたことである。グアム島の万岩山とか、スリバチ山とか、その他の山も丘も数限り無い爆撃で全容は変形し、そのうえジャングルへ向けて後退する日本兵の後ろから撃ちまくるので、折り重なって倒れた日本兵であたりは全く地形が変わってしまった。そのためグアム島の諸川は幾日も血の色が失せなかつたとか、後から島の人達から聞かされたことである。その後は、一筋の煙にも木の葉のわずかなそよぎにも容赦なく浴びせる機関銃攻撃のため、あらゆる所で日本兵の数は失われていった。

私はこうした中を逃れながら瀕死の日本兵の最期に何度か出会ったが、息を引き取る前に、有るか無いかの声で呼ぶのはやっぱり「母さん」か「おつかあ」か「お母さん」がほとんどだった。私も本当につらくどうしようも無い時、まぶたの裏のおふくろに向かつて「かがまあーっ」と呼んでみた。大粒の涙がころころと出た後は不思議に心が休まり、また新しい力が湧いてきた。

お体のあまり丈夫でない部隊長の従兵として常に気を配り、悪条件の中、あれこれと食料のことを

考え続け、軍司令部を引き揚げる時、米びつの底をさらえて片方の靴下に七分目の米を入れ腰につけていたのを部隊が別れて行動するようになった時、部隊長と相談してその青カビで固くなった米粒を石灰岩の底の水で洗って岩陰のくぼみで鉄かぶとで煮て、有り合わせの広い葉っぱに分けてすすりあった時のおいしかったこと。長いジャングル生活の中で時々思い出してはつばを飲み込んだものだった。

グアム島に米軍が上陸して駐屯するようになり、島のあちこちにゴミ捨て場が出来てきた。ジャングルに逃げ込んだ日本兵にとつてこのゴミ捨て場は何ともありがたい食料倉庫だった。

ちよつとふくらみの入った缶詰とか、ちよつとカビの見えるパンとか、匂いの悪くなったコーヒーなど、シャツから靴に至るまで「持てる国アメリカさん」の捨てるものは敗残兵にとつてありがたい限りであった。しばらくしてそのことに気付いた米軍は、その都度ガソリンを掛けて焼くようになってしまった。

毎日来るスコールで湿気があり、蛙は何種類もいたが、食用にできるようなものはいなかった。その中の大型の蛙について後々聞いたことでは、大昔グアム島に毒ヘビが多くいて困った時アメリカから毒のある蛙を輸入して島に放ったところ、毒ヘビは絶えて蛙が繁殖したとのことだった。

私達のグループも日本の蛙のことを思つて喜んで捕まえて焼いて一口食べたところ、口の周りや舌が異常にしびれて苦みが走り、皆一様に吐き出して助かった。野生のブタを捕まえてやれ嬉しや、し

ばらくごちそうになれると思つても一度には食べられず、すぐ腐つてしまつて捨てたことも度々あつた。

何と言つても助かつたのは椰子やしの実だつた。若い実はジュースのようにおいしく、大きく実るに於て色々な味になり栄養価も抜群だつた。

北岬への逃避行

日本がグアム島へ兵隊を送りこんで戦争準備はしたものの、輸送を断たれ物資の無いまま米軍に島の中央で分断され、南へ北へ逃げ散つた兵隊達も、凶り知れない砲弾で次々にやられて、後はジャングルでも多く死んで、生存した数ははつきりとは分からないらしい。私が従つて逃げた新井少佐一行も、初めは二十三人ほどの隊員だつたが、はぐれたり死んだりして終わりは三人だけになつた。その内の一人も下痢で苦勞して動けなくなり自決して、後は私と部隊だけの生活が米軍の捕虜になるまで続いた。米軍の監視の中、お体の弱い部隊長を守りながら食料を探しつつ、言語に絶する思いをしながらひたすら北へ、北へと逃げ歩いた。この島の北はずれに北岬と呼ばれる場所があり、その一角に珊瑚礁に邪魔をされないで船を付けられる岸壁があり、日本軍グアム島の兵士を救い出しに来るとしたらそこだけが頼みとの連絡を頼りにようやくたどり着いて、その付近の洞窟を住み家に、食料を探しつつ転々と逃げ回ることになつた。

ただ幸いなことは、グアム島は常夏の国であつたので、寒さに苦しむことは無く、年中暖かいため植物も豊富で、何とか生き延びることが出来たと思う。

長いジャングル生活のうち、時には夕闇にまぎれて海辺へ出て塩分恐しさに海水をたらふく飲んで腹をこわしたり、海辺でヤドカリを見つけて殻ごとバリバリかじつて皆すごい下痢に苦しんだり、米軍に見つからぬように探す食料には限度があり、何日も食べるものにありつけず、その辺をうろちよろするネズミを捕まえて夜になつて岩陰で焼いて食べた時、小便臭いようなその夜のごちそうに涙したこともあつた。時には、痩せて骨ばかりのような腕の血を吸つた蚊をつまんで食べたり、何でも食べられそうな物を二人分ずつ探す日が続いた。

入隊する時（昭和十八年当時）、大枚七十円で買って持っていた二尺三寸の「昭和刀」は椰子の木へ登る足掛りを作つたり、実を取るために側の木を切り、倒し掛けたりして使つているうちにグニャグニャ曲がり、でこぼこして鞘に納まらなくなつて使い物にならなくなつていった。後で部隊長持参の古刀を任せてもらい、それを食料探しに持ち歩いたが、さすが古刀は少しばかりの無理には曲がつたり鞘に納まらなくなるようなことはなかつた。湿地に自生しているタロ芋を見つけて土ごとかぶりついたり、少し余裕ができるのと岩陰で鉄カブトで煮て食べたり、マンゴー・パイア・パンの木・バナナ等、人里近くにはやはり食べる植物も多かつた。人家近くの椰子の木には登り用の足掛りを刻み込んだ木も有り、本当に命拾いをした。

まだ前のことだったが、一行でジャングルを歩いてると不意に前を行く人影が消えることがあった。島全体が石灰岩で至る所に洞窟があり、草木でおおわれ穴へ落ち込むと仲間同士でも助けられないことすらあり、まして一人では生きて見つかるはずはなかった。私も一度ならず落ち込んで、尾てい骨を死ぬほど突き上げられたり、頭部と言わず顔面もぶつけてもう駄目かと思つたこともしばしばあった。散々逃げ歩いて最後に見つけた白浜と呼ばれていた海岸沿いの絶壁の洞窟には、底にはきれいな水があり、一番永住できた。絶えず体から離さず持っていた自決用の手榴弾とごぼう剣一振りを洞窟の中の棚状のくぼみに隠し、ここを根城に食料探しに出掛けていた。

逃亡中の戦友達

部隊長と自分と、あと一人の戦友は、三人で逃げ回るうち、あまり丈夫で無かつたことと食べ慣れぬ物で胃腸を壊し、下痢に次ぐ下痢で立つてもいられなくなり、部隊長や自分に迷惑をかけるからと苦しんでいた。洞窟の奥に枯草を敷いて寝かせ「何か探してくるから」となだめて洞窟を這い出した時、奥の方でドーンというような鈍い音がした。驚いて引き返してみたら、長い間苦勞を共にしてきた戦友は、自分で最期の手榴弾を使つたらしく、あたり一面飛び散つた肉片と血潮だらけになっていた。

また、はぐれて心配していた戦友に、すごいジャングルの中で偶然再会して涙で語り合つたことも

あつた。長いジャングル生活で体調も悪くなり、身の軽さを自負していた私も高い椰子の木の上に鈴なりの実を見つけても、とても登って行けず、切り倒しも出来ず、涙を飲んで見過ごしたこともある。また、思わぬ低い所にパンの木の群生地に出会いしばらく休養したこともあつた。また、部隊長以下数人の逃避行中、一人の兵士に食料を得るためにと部隊長の護身用の十四年式十五連発の拳銃を貸したが、その兵士はどうなったのか、ついに部隊長のもとへは帰らなかつた。

終戦の知らせ

ジャングルで逃亡生活を重ねるうちに、機関銃による日本兵退治の代わりに、島の上や浜の方からスピーカーで意外なことを呼び掛け始めた。「ジャングルの中の日本の兵士達よ、日本は戦争に負けただから早く出てきて降伏しなさい」と確かな日本語で色々な情報を次々と毎日呼び掛けるようになった。日本の兵士達はとても信じられなく、なかなか出て行かなかつた。そうするうちに今度は部隊長が米軍のスピーカーで名指しで呼び掛けるようになった。

「新井少佐殿、貴方がそちらに見えることは分かっております。貴方が出て来られれば、多くの日本兵が救われます」等といろいろ言われ、自分が行けば多くの日本兵が救われるのなら行ってみるとおっしゃるようになった。行かれるなら自分も同行しますと申し上げても「一か八か分からぬから取りあえず私が出掛けてみる」と、私の同行を振り切るように浜辺の方へ降りて行かれた。浜辺では米

軍側でも上級将校が出迎えに来ていた。

それと同行していたのは新井少佐の元部下で「ヒラカズ」と呼ばれた日本兵で、その時はもう捕虜となっていて、新井少佐を探しに同行していたのだった。お互いに再会を喜んだり、いろいろな話を聞かれて、泣きながら敗戦を確認されて、また改めて新井少佐のお声でスピーカーでジャングルに向けて日本兵達に出て来るように呼び掛けられ、私をはじめ多くの日本兵達がジャングルを出て投降し、米軍の捕虜となった。

部隊長が持つて行かれた日本刀はその場で米軍将校に寄贈され、胸ポケットに残し持つていた色々の勲章を米軍将校の希望にもかかわらず「これは陛下よりいただいた物ゆえ、人に渡す訳には行かぬ」と胸に納められた。私達も万一の用心に洞窟に隠した手榴弾とごぼう剣は棚の奥に隠したまま洞窟を出て、米軍の捕虜となったのである。

捕虜となり収容所生活が始まる

私達が連れて行かれた先は臨時の収容所で、次々と収容される日本兵や日本人を住まわせる建物を捕虜達を使って作ることになった。その収容所はスターケと呼ばれ一辺百六十メートル四方の周囲を金網で二重に張り、囲いの金網と金網の間一・五メートルの中をいつも銃を持った番兵が巡回していた。

一つのスターケにはおよそ五、六十人の日本兵が寝起きしていて、それぞれ自分の「一角」を持つことが出来た。一人で毛布二枚ずつ支給され、土間の上にそれぞれ拾った段ボールや椰子の葉などを敷き、その上に毛布一枚を敷いて一枚は掛け用とした。

収容所は、柱は椰子の木等を切ってきて造り、屋根も椰子の葉等で葺かれてニツパハウスと言う造りであった。トイレは土中に穴を深く掘り下げ、一舎に縦五つの穴が二列並んでいて、その上に木の椅子、フタ付トイレが背中合わせに一舎で十人一度に用便出来るようになっていた。毎日ガソリンを掛けて焼くのでとても清潔だった。

米軍側にはもう既に大分前から収容された大勢の日本兵士、日本人が集められていた。米兵の日本兵に対する態度は意外に温かく、十分な食料や住まいを与え、虐待等というようなことはなかった。私達の収容されたのはほぼ中頃らしく、後から後から日本兵や日本人が収容されてきた。

その捕虜達を取り調べるために必要な日本語を教えるために、捕虜の中から元グアム島民生部書記室の新納さんという、日本語はもちろん英語も島民語も達者な人が選ばれ、あと五人ほど選び出し、米軍側へ行って日本語を教えることになった。

私も選ばれて日本語教師となった。生徒は二十人前後で初歩の日本語を知っている人達で、捕虜になった人の取り扱いや病人達の訴え等で分からないことを習っていた。教師の仕事は毎日ではなく、必要に応じて呼びに来た。

特に気になったのは、元日本軍が研究していたとされる風船爆弾や吸着爆弾とかをしつこく質問された。米軍通訳では言い表せない言葉を私達に質問していろいろと覚えて取調べを進めていた。そうした日本語教師の仕事が三カ月ほど続いた後、今度は炊事班へ変わることになり、後はずっと炊事班で働いた。

それと、ずっと気になりながらなす術のなかった新井部隊長のその後は、米軍で調べた結果、一応戦争処罰関係の人物として私達とは別に引き離されて、やがて米本土行きが決まった。

部隊長にお会いした時「米軍も許してくれるらしいが、君も米本土へ行きたければ行かないか」とおっしゃってくださいましたが、その時の思いとしては、今、米本土へ渡ればもう永遠に両親に会えないような気がして、部隊長の好意は辞退したが、後で後悔したことも事実である。

昭和二十一年頃の収容所には、だいたい千人あまりの大世帯で、米軍から支給される麦粉とかトウモロコシ等で空腹を忘れた安定した生活が始まった。偶然出会った知人と生存を喜びあったり、良い事もあったが、何にしても来る日も来る日も金網の中で銃口で見張られた生活と日本離れた食生活にだんだん飽きてきて、工事にかり出された先で、パイアやマンゴー等の果物を見つけ番兵の許しを受けて収容所へ持って帰った。

グアム島を米軍に占領され、終戦になり捕虜となって各種の作業に連れて行かれた時、ある現場で偶然ペトロマテネス氏と再会した。

氏は私を覚えていてくれてとても懐かしがり、気の毒がつてアルコールの一滴も飲めない収容所内のことを良く知っていて、その時私と一緒に仕事に来ていた日本兵四人共にビールをごちそうしてくれた。氏は真つすぐに歩けるうちは大丈夫と言い、一本の線を引いてその上を歩かせてみてはまた飲ませてくれて、仕事を終わって帰る私達を、収容所へ入る時、番兵にとがめられないか心配して、門内へ入るまで見届けてくれた心優しい人だったことを今でも時々思い出す。

日本へ帰れるとの朗報

収容所の捕虜達が敗戦の絶望から、そして捕虜になつて米軍の感謝の気持ち、そして収容所内の金網の不満、それから日本へ帰りたい焦り、次には到底望み難いこととまた絶望になりかけたある日、捕虜を日本へ返してくれるらしいとのニュースが舞い込んで来た。捕虜達は互いに肩を抱き合い喜び泣いた。

数日後、捕虜各自に故郷へ手紙を書くようにと決められた用紙が配られた。みな天にも昇るような心地で決められた紙面の上に万感の思いを込めて手紙を書いた。そしてまだ日時が分からぬながら日本へ帰れる希望が持てるようになった捕虜達は、それからは何でも日本へ帰つた時の土産になるような物を自分の枕元に集め始めた。米軍がゴミを焼く前に見つけて来たTシャツや靴等、コツコツためて喜びあつた。次にそれを背負つて帰るリュックサック等を米軍のシートの切れ端等を拾つて来て一

一人がたどたどしい手付きながら何とか背負える物を作り上げた。それらは皆だいたい日本へ背負って帰れた。そして後で支給された軍服等と共に日本へ帰ってから貴重な物資となったのである。

また日本へ帰れると決まってから私達炊事班の中で砂糖とイースト菌で酒を作ってみた。出来上がった酒は最高の出来だった。本当に久しぶりのアルコールに皆酔って喜びあった。スターケを見守る米兵達も見て見ぬ振りをしてくれた。生きていて良かったと涙する一コマだった。

私は、次のような手紙を家族へ送ることが出来、家の者たちの喜びを思いながら書いた。

「謹啓

故郷を出て満三カ年 幾千里離れし当グアム島にて終戦を知りてより早一カ年を過ぎし今日、好意ある米軍の取り計らいにより、感無量の思いで筆をとりました。

年若いし父・母上様はじめ皆様いかがお暮らしか御無事で新生日本の建設に御精進の事と推察いたします。降りて正雄儀、幾多の死地に遭遇し将又千苦満難に接したるも神仏の加護により萬死に一生を得て、今日收容所にて苦しき中にも一片の望みを持ちて帰国の日を一日千秋の思いで暮らし居ります。斯くの如く一生を得しも此一重に御祈念下されし賜と深く感謝致しております。いろいろ書きたき事は多々ありますが紙面、その他の事情にて書き得ず御推察下さい。

では最後に皆々様の御健康と御多幸を祈りつつ筆を止めます。まずは近況一報旁々御伺い迄

敬白

御家内一同様へ

正雄

二十一年九月一日

グアム島 米軍収容所 砂田 正雄 拜」

割腹自決された三中将のお遺骨

いよいよスターケを引き揚げる日も近づいて、元日本軍の主だった方々が寄り合って、グアム島で割腹自決された三將軍のお遺骨も御一緒に帰りたいと米軍側へ願ひ出た。三將軍とも副官がいろいろ整理して土葬した所も知っていると、米軍の許しを得て、その場所に行ってみたら、御三方の墓は米軍の土地整理のためブルドーザーで整地されていて無くなっていた。同行し居合わせた中央方面軍参謀竹田中佐は土葬されていたと思しきあたりから土を取り、包んで、抱いて一緒に帰って来たとのことだった。

こうしたいいろいろの情報を私が入手できたことは、部隊長の従兵としていた時はもちろん早く耳に入つたし、部隊長が米本土へ渡られてからも以前からの付き合いで上層部の将校の方々との交流が続いていて最後まで良くして下さったことは有り難かつたと思う。

グアム島を離れ、一路我が家へ

日本へ帰れる日も決まり、駆逐艦を改造した輸送船に乗ることになり、番兵をしていた米軍の兵士達は収容所から港まで護衛してくれた。いよいよ別れの時、彼等は英語で「螢の光」を歌って別れを惜しんでくれた。本当に皆情のある人達ばかりだったと今でも思い出す。改造された何艘もの輸送船で、今まで捕虜となっていた日本人全員が日本へ送り返された。

諦めかけていた日本の土を踏むことが出来たのは、昭和二十一年十一月二十五日であった。

到着したのは神奈川県浦賀港だった。検疫が行われ、着替えの軍服が支給された。この時米軍の帳簿により、捕虜収容所で働いた分の賃金が、一日八〇セントで計算し、収容所での食費や日用品の代金は賃金から差し引いて払ってくれた。この時支給されたラシャの軍服等を九州方面の人達はいらないとのことで、このお金で私は安く譲ってもらい、兄や弟への土産が出来た。

三日後、設営隊を解散してグアム島生き残りの隊員達は、それぞれ汽車に乗り込み我が家へと向かった。汽車の中で昔と違って朝鮮の方達の横暴ぶりに驚き一喝しようとして、乗り合わせた土地の人達に事情を聞かされ敗戦の悲哀と共に、腹の虫を納めるのに苦労した。

そしてまた、自分では丸三年三カ月も御国のために苦労して来たつもりなのに、浦賀から我が家へ帰る道すがらの人々の態度はあまり心嬉しいものでは無かった。疲れいらだった人々は心までゆがんでしまったのか「大きな荷物を背負った復員の軍人さんは物持ちで得をした。わしらは焼け出されて何も無い」みたいなことを聞こえよがしに話した。

一方、米本土送りとなった新井部隊長は、いろいろと戦犯の取り調べを受けた結果、戦犯者でないとの通達を受け、私より三月ほど早く日本に帰り、高山の私の生家砂田家を訪ね「正雄は生きてグアム島にいる」と知らせて下さっていた。

戦場へ旅立って以来何の音沙汰も無いし、敗戦となり生きてゐる望みは無いと悲しんでいた両親や家族達は、皆一様に安堵して喜んで待つていてくれた。

汽車が高山駅へ着いたら兄が迎えに来てくれていた。三年三カ月ぶりに兄と涙の目を見交わして、兄の老けたのに驚いたのを思い出す。丸三年三カ月の重みと、長さをずんと感じた思いがした。

兄は自転車で先に帰り、私はバスを待った。丹生川行きの木炭バスは「もう満員です」と見知らぬ運転手に乗車を断わられた。荷物は重いし困り果てていたところ、白井の後の県会議員大西市蔵氏が、「長い間御苦労さんだった」とねぎらつて下さったうえ、周囲の人達に「復員の兵隊さんだ、自分が降りてでもお乗せしなければ」と、自分は降りられ私をバスに押し込んで下さった。日本へ帰つて来て、初めて胸のしこりを優しく撫でていただいた思いだった。

ようやく白井へ到着。停留所へ降り立った時偶然、出征の時村境まで送ってくれた村娘の一人にばつたり出会った。「まあ、生きて帰られて良かった」と心から喜んでくれた。本当に久しぶりにはほのとした気持になったことを今でも思い出す。

急な坂を荷物を背負つて登り、ようやく我が家へたどり着いたのは十一月三十日の夕方だった。白

髪が増えた両親や叔父様や兄夫婦、姉や弟妹達、初めて見るかわいい姪に囲まれて積もる話に花を咲かせた。グアム島で出した手紙も到着していて、それ以来、母は当時極端に物の少ない中を、帰って来る息子のためにいろいろ買い寄せ集めて待つていてくれた。

久しぶりに手足を伸ばして休んだ我が家の温かさに触れて、なお、亡き戦友達がしのばれて「戦友達に悪い」と思いながらも、やっぱり両親に会えた嬉しさは隠すことは出来なかつた。

家に帰り落ち着いたところで、先に帰られた新井元部隊長を訪問した。久しぶりの再会に手を取り合つて涙して喜びあつた。新井様宅では、奥様も子供さん方も共々に「私のお陰で主人が、父が永らえた」と口を揃えて、とても丁寧に何度もお礼を言われて恐縮したものだつた。しかし、部隊長はせっかく苦勞して日本に帰られたのに、翌年九月東京方面へ出掛けた時、台風水害に遭われ、自動車事故で亡くなられたことを聞き、何ともやる方無い思いをしました。

四十年目のグアム島へ

(中矢美千子)

昭和六十二年一月二十五日、息子達の計らいで夫婦二人、グアムへ旅行した。

息子らの 情けで向かう グアムの旅

手を振る孫の 幻影胸に

御いくさに 夫も聞きし 滑走路よ

万感胸に 今降り立つ

この丘も あのジャングルにも その浜も

飢えつつ戦友と さまよいし道

洞窟より 声なき声の 慟哭が

胸をつらぬき 伝うせつなさ

敗戦の 責めを身に負い 自決せる

中将の悲憤 胸に迫り来る

この丘の 上にて己が 玉の緒を

絶ちにし人の 御霊安かれ

声もなく ただ声もなく グラム島の

四十年前の 岸壁に立つ

あの洞の 奥にて病軀を 自決せる

戦友へ持参の 香を手向けぬ

敗戦の 思い出積もる 北岬

訪うすべもなく はるかに眺む

見はるかす 北岬の あの洞窟の

手榴弾いま　いかがなりしや

幾海里　離れし島の　慰霊塔

ハイビスカスの　咲きて空しき

激戦の　傷跡今だ　生々し

すりばち山の　嗚咽聞こゆる

今だに胸に痛いのは、ジゴン村の平和寺の和尚様に聞いた話です。ジャングルのすぐそばに建てられたこのお寺の台地は、ゴミを埋める穴を少し掘っても人骨が出てくるとおっしゃっていました。日本兵がジャングルへ敗走する後ろから機関銃で撃たれて、大勢折り重なって亡くなった兵士達の遺体の臭いがすごくなったため、下の窪地へブルドーザーで押し片付け、土をかぶせてならして台地とした。そこへ平和寺を建てたのだとか。

何ともやり切れない思いで、もう一度ジゴン村の平和寺へお参りをしました。お寺の観音様の前には、このお寺をお参りした人が記帳するようになっていたが、あまりたくさんの人の名は無かった。何となく吹く風の音さえ死者のむせび泣く声のように思えて、何度も何度も般若心経をおとなえして帰って来ました。

ホテルへ帰って砂浜を見れば、ハネムーンの人や、若い友達連れで何とも賑やかに泳いでいて、明

暗を分けた複雑な思いの旅でした。

さても佳き 南の島の 砂浜に

天下晴れての 若き弾ける

激戦の 血潮に染みし この島へ

今華やかな ハネムーンの渦

おみなとて 撃ちてしやまん 竹槍に

国守るてう 青春ありき

中矢 美千子

戦後五十年余を過ぎて思うこと

再びグアム島を訪れて、亡き戦友達の慰霊を済ませ早や十年が過ぎました。

平和な幸せな御代に長生きさせていただいて折に触れ思い出すことはやっぱり戦友のことです。自分が幸せであればある程、若くして散った戦友達が哀れです。私が古稀を過ぎた暮れの塔婆供養の時に、和尚様をお願いしてグアムで散った方々のためにささやかながら法要をおつとめしていただいた。いつまでも脳裏を離れぬ当時の悲惨な光景を思い出しながら冥福を祈ったものです。

散った戦友達のことを思えば、生ある者ゆえ、いささか苦勞もして来ましたが、今現在、孫や子に
囲まれて幸せな平和な暮らしを営ませていただいて有り難いと思っております。

合掌